順天堂大学医学部九号館三番教室

一　近代朝鮮の女子医学教育　三崎　裕子

一　人工受精児出現ト其ノ育児論ヲ通ジテ、大脳知新時代出現風評ニツイテノ私見　宮田十寸穂

三月例会　平成四年三月二十八日（土）

順天堂大学医学部九号館三番教室

一　医心方における夢の記述について　槇　佐知子

一　長谷川泰の大学東校時代より済生学舎開校までの経過
—ドイツ医学導入問題・相良知安の「建白書」・佐藤尚中の済衆舎設立—　唐沢　信安

四月例会　平成四年四月二十五日（土）

順天堂大学医学部九号館三番教室

一　ギリシャの医史跡　酒井　シヅ

一　「紅夷流道具集解総図式」の成立とその原典について　蒲原　宏

例会抄録

「長谷川泰の大学東校時代から済生学舎開校迄の経過」
（ドイツ医学導入問題・相良知安の建白書・佐藤尚中の済衆舎）

唐沢　信安

長谷川泰は新潟県長岡市福井町の出身で、天保十二年（一八四二）生れの蘭学者で、特に語学に秀でた人物である。

泰は佐倉順天堂の佐藤尚中に医学を学び、更に江戸幕府の西洋医学所に通った。北越戊辰戦争では、長岡藩の軍医となり河井継之助に従って戦い、自宅も戦禍で焼失し、失意の中にあった。

その頃、新政府では石神良策を中心に新しい「医学校兼病院」が設立され、医学教育の模索が準備されつつあった。

斯くして長谷川泰にも明治二年、佐倉順天堂時代の僚友相良元貞より便りが届いた。「此度兄の相良知安と福井藩の岩佐純の二人が医学校取調御用係となり、医学校を新たに造ることになった。教員の人材に困っているので上京しないか」との要請であった。

泰は父、宗斎を郷里に残し明治二年十月に上京している。

東校では戊辰戦争で功績のあったウイリアム・ウイリスが独りで学生に講義を行い、負傷兵の手当を行って多忙を極めていた。この英国公使官医官ウイリスの加療を受けた薩摩、長州、土佐出身の要人達は、彼の講述する英国医学を以て、今後の日本の医学の主流とする風潮があった。

それに対して、相良知安と岩佐純の二人は、「今後の日本の医学は、ドイツ医学を導入して行うべきである」と強く主張した。それを学内で強力に支持したのは長谷川泰と石黒忠悳の二人であった。又、知安の相談に乗って賛意を表したのは、オランダ生れの宣教師フルベッキであった。激しい論争の末、知安の作った建白書をめぐって廟議が開かれた。その席上で薩摩や土佐藩の支援する「ウイリスの英国医学に範をとる」説が破れ、大学別当の土佐藩主、山内容堂は免職に追いやられた。以後、知安は土佐藩出

身者より猛烈な怨を受ける事となる。

明治三年九月、知安は大学東校の会計係森之介の金銭流用事件を理由に、無実の罪で、一年半の獄中生活を送る事となる。その間、長谷川泰と石黒忠悳の二人は、岩佐純を助けて学校経営に必死の努力をした。

失脚したウイリスは西郷隆盛と石神良策の計らいで鹿児島医学校へ明治二年十二月三日に去って行った。そこに泰の恩師の佐藤尚中が漸く上京し、大学東校校長、大博士となり、大学の制度の改革を打ちだした。

(一) 洋方医の速成が急務であること。

(二) 一般庶民の為の「貧民救済」の病院を東京府で設立する事、を願い出た。

そのために学制改革を行い、「変則生」(修業年限三年で訳述書で学ぶ洋方医速成課程)と、「正則生」(修業年限五年で、原書で学ぶ課程)の二種類を設けた。この洋方医の速成こそ、尚中が最も熱望するところであった。

その間、長谷川泰は少助教から大助教へと昇進し解剖学を担当し、中舎長となっている。

新政府の要請で着任したドイツ人教師ミュルレル(陸軍少佐)とホフマン(海軍少尉)は絶大な権力を与えられた。二人は軍の委託生であったため、既にドイツでは実施されていた大学の自由教育を採用しなかった。そこで「軍医学校(ペピニエール)」のカリキュラムをそのまま大学東校に実施した。さらに尚中の作った「変則生」の制度を無断で廃止した。又約三百名の学生を五十九名に減じ、八年制(予科三年、本科五年)の学制を作った。

尚中は自分の理想とする教育と異なるミュルレル・ホフマンと正面衝突を起こし、校長の職を長谷川泰に譲り官を辞して野に下った。そして庶民のための病院である「順天堂医院」を明治六年に下谷練塀(ねりべい)町に造った。更に「済衆舎」なる医学校を明治六年十一月に、浅草西鳥越の松平忠敬邸に造った。

実習は順天堂医院を使用し、東校を追われた二十歳以上の学生を収容し、修業年限は二年半とした。其の間、長谷川泰は出獄した相良知安に校長職をゆづり、校長心得として知安を助けた。明治七年八月二十七日、政府は知安の勢力を裂くため長谷川泰を長崎医学校長に左遷した。一方、尚中は手狭となった順天堂医院を湯島に移築して明治八年四月三日に移ったが、十三日には大喀血で倒れる結果となった。長谷川泰は長崎医学校長を辞して、尚中のすぐ近く本郷元町一丁目十番地に居を構えていたので真先に駆付けた。泰、佐々木東洋、岡本道庵、大滝富三、阿久津資生が治療に当った。ドイツに留学中の佐藤進は電報で帰国を促された。この時、尚中の果せなかった医学教育、特に「洋方医の速成」を依頼されたのが長谷川泰であった。明治八年十二月二十四日、泰は「済生学舎」の開校願いを出した。そこには自由教育の学風が吹き込まれていた。

(平成四年三月例会・於順天堂大学)